
A d v e n t u r e o f j e w e l

灰猫アルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Adventure of jewel

【Nコード】

N5898V

【作者名】

灰猫アルタ

【あらすじ】

と人間の絆の物語です。運命を手にする為に何が必要か？夢で繋がった 願いを掴んだ 少年達の冒険。

ケルト王国……そこは、妖精に愛された国。

別名 『妖精の国』ティル・ナ・ノーグとも、呼ばれている。

神の恩恵を受けた 聖なる国であり 他国からは、一目を置かれていた。

自然が豊かで 妖精や精霊達が、同じ空間で 共存している。

他の国では、見られない光景も この国では、当たり前のことなのだ。

かつて この世界は、妖精と精霊を犠牲に 世界を壊そうとした。

けれど 13人の救世主の出現によって その危機は、回避されたのだ。

彼らは、その後 国を支え 発展に協力したと言われている。

その中でも 国の長として 王位を継いだのは、救世主の中でも 世界を救う為に 自分の命を賭けた男。

人々は、彼を慕い より一層 国は、繁栄していった。

このケルト王国では、その者の血を濃く継ぐ者が 王位を継承する権利を持つ。

救世主と同じく 闇の纏う者—— 本来 闇は、忌み嫌われるものだが 救世主達の活躍によって それは、希望の象徴へと変わった。

絶望から 人々を——世界をも、救った 奇跡を呼ぶ色として 称えられるようになったのだ。

神にも愛された 色としても、知られている。

救世主の血筋として その色は、今でも国を支える者として 今も根付いているのだ。

+++++

少年—— ルークは、夜明けと共に 手作りの弓矢を手に 小屋を飛び出した。

向かった先は、銀色の光に包まれた 森。

ルークの住んでいる アヴァロン村では、ここを『銀の聖地』アールガットと呼ばれている。

常に銀の霧に覆われ 視界を遮ってしまう。

道を誤れば 命の保証はない。

森の中には、危険な場所が、多くあり 森の供物—— 銀の獣達が、生息しているのだ。

その世界は、弱肉強食—— 命の奪い合いが、当たり前のように行われている。

彼らの陣地に足を踏み入れるということは、自分の命を賭けなければならぬ。

「うーん……いい朝日だ。いい獲物が、捕れそうだ」ルークは、言う。

そして 弓矢を構えて 空に向かって 鈴の付いた矢を放った。

すると 矢は、鈴の音を鳴らしながら 空に吸い込まれていく。

しばらくすると 空は、矢の吸い込まれた部分から 薄暗い 森の中に 日が差ししてくる。

まるで 矢を受けて 下を覗き込んでくるかのように。

それを確認すると ルークは、その場で膝をつき 頭こっぺを垂れる。

「狩りを守護し ケルヌノスよ。
今日も、森を供物を 我に与えたまえ」

ルークの淡々とした声は、静まり返った 森の中に 響く。

すると その声に反応するかのように 獣の遠吠えが、聞こえた。

それは、了承を意味する声。

この森は、遥か昔から 狩猟を守護する 神：ケルヌノスが、住んでいる。

狩りを担う者は、皆 彼に森に住まう 供物（命）を奪うことを許
可されなければならない。

許可なく 供物を狩れば 天罰が下り それ以降 森に足を踏み入
れることさえ 不可能になるのだ。

ルークは、立ちあがて 森の奥へと足を進める。

すると その先に 先客がいた。

「ディムナ……… もう 来てたんだ？」ルークは、言う。

「ああ、まあな？

それから 今日は、天候が早く悪化するらしい。

風の精霊シルフィが教えてくれた」先客—— ディムナは、素っ気なく
答える。

その言葉に ルークは、天を仰ぐ。

鳥の声が、いつもよりも 聞こえず 蟲むしも、木の間や土の中に隠れ
てしまっているらしい。

「うつわぁ まじで？

今日は、大量のつもりで はりきってきたのに………」

ルークは、そう言って 頂垂れる。

「精霊の声を聴き忘れた お前の責任だ。
この前だって 注意を怠って 崖から落ちて……………湖の乙女ウィウィアンに助け
られたんだろう？
確か それで……………「忘れようとしていたのに……………思い出
させるなよおッ！」

ディムナの言葉をルークの叫び声が、遮る。

その顔は、真っ赤だ。

「別に いいんじゃないの？

女の子と間違えられたことなんか……………悪いことじゃないだろ？」
ディムナは、呆れたように 言う。

「大問題だ！！

俺は、男なんだぞ？それなのに……………女と間違えられるだなんてッ
！」ルークは、ふて腐れるように 呟く。

そんな幼馴染に ディムナは、苦笑した。

「まあ そんなに焦らなくたって 背は、伸びるさ。
お前は、まだ 若いんだから」

「若いってさ？ディムナとは、2つしか変わらんないんだけど？
それに 俺くらいの年では、既に 金の林檎アウアルの樹の枝に手が届いて
いたじゃないか。

いつも クラリスの収穫を手伝っていたから」ルークは、近くの石に腰かけて 言う。

「成長期なんて 誰もが、同じじゃないさ。
ルーク…… お前は、お前だ」

ディムナも、同じように 石に腰かける。

ルークは、その言葉に まだ 納得がいていない。

どんなにそう信じていても 結局は、誰かと比べられるのだから。

「まあさ？ 悩んでいるうちは、楽しいんじゃないの？
大人になったら 違う意味で 大変なことになりそうだし」

ディムナは、そう言って 近くの枝に向かって ナイフを投げた。

すると 小さな悲鳴が聞こえて 獣が、地面に落ちてくる――
ラビィ
兎だ。

見た目は、弱いが この森に住む ラビィ 兎は、人の肉を食らう。

特に 子供を好んでいるらしく 時より 村に来て 浚っていく。

ただ ラビィ 兎の肝は、腹痛や下痢に効くので 狩りの標的になりやすい。

噛みつかれる前に仕留めてしまえば 簡単に 狩ることができる。

「うげ………^{ラウイ} 兎だッ！

寒くなってきたのに まだ 冬眠してないのかよ。
村長に伝えておかないと」^{ラウイ} ルークは、事切れた 兎を見て 呟く。

「最近 風の精霊^{シルフィ}と蛇の精霊^{ネエティ}の話だと 自然の理^{ことわり}が、おかしくなっているらしい。

本来 いるはずのない土地に 違う種族の獣がいたり 精霊^{ラウイ}や妖精が、生まれにくくなっているらしいんだ」^{ラウイ} ディムナは、兎の亡骸を籠の中に入れて 言う。

「自然の理か……… そうですね 最近 精霊の数が減ってるな？
妖精達も、何かに怯えているみたいだったし」

ルークは、そう言いながら 首をかしげる。

最近 妖精や精霊達が、騒がしい。

何かを恐れ 何かから 逃げているようなのだ。

「そういえば お前は、守護している精霊は、姿を現してくれていないけど……… 妖精や精霊の声が、聞こえるんだっけ？

昔は、誰もいないところで 笑ったり怒ったりしていて 変な奴だとは、思ってたが」^{ラウイ} ディムナは、真剣な顔で 呟く。

その言葉に ルークは、言葉が見つからなかった。

確かに それは、自分でも思うところがあったのだから。

2

2

村に戻ると 木の上から 大きな果実が、落ちてきた。

それは、見事に ルークの頭に命中する。

ディムナは、それを避けたから 当たることはない。

「いつてえ……………って これ……………金の林檎アウアルの？
危ないじゃないかッ！」

驚いて 見上げると 頭上から 笑い声が聞こえてくる。

その声は、少女の声。

「フフフ……………油断大敵でしょう？
狩りの名人も そんなところかしら？
ディムナをこらんなさいよ……………見事に 避けてみせたじゃない」
少女—— クラリスは、言う。

クラリスは、軽やかに 木から降りてくる。

「いくらなんでも 無茶なことは、すべきじゃないんじゃないか？
万が一 潰れたら勿体ないぞ？」

「今日 一番の金の林檎アヴァルよ？」

そう簡単に 潰れるわけがないじゃないの」「ディムナの言葉に ク
ラリスは、きつぱりと言い放った。

「確かにそうかもしれないが……………」

「おい………… 2人とも 俺の怪我の心配は、しないつもりか？」ル
ークは、頬を膨らませて 叫ぶ。

そんな幼馴染に ディムナとクラリスは、顔を見合わせて 笑う。

清々しく おかしそうに。

「それで この金の林檎アヴァルは、何の為に収穫してたわけ？」

いつもよりも 時期が早いんじゃないの？」「ルークは、思い出した
ように 呟く。

「ああ………… もうすぐ 『乙女祭り』でしょう？」

だから 今現在で 実の生っている 金の林檎アヴァルは、収穫することにな
ったんですって。

乙女の選出は、全ての金の林檎アヴァルを集めてから 決めるそうで……………」

乙女——とは、神に選ばれた 巫女見習いのこと。ケルト王国に存在する 3つの領地から 1人ずつ 白花・赤紫花・青紫花^{ナル}として 選出される。乙女

は、ひと月間 祈りの祠の中にこもり 国の繁栄と世界の平和を願うのだ。その願いは、国の中心に存在する 『聖女』の住まう 神殿にて 神へ伝えられ 国の平和が、保たれる。乙女に

選ばれた者は、1つだけ 願いを叶えてもらえるという噂だ。

「ふうん…………その様子だと クラリスも、立候補するつもりなんだ？

一体 どんな願いを叶えてもらいたいんだよ」ルークは、面白くなさそうに 言う。

「あら…………あたしは、他の子達のように 玉の輿にのりたいとかじゃないのよ？

あたしの願いは、巫女姫様にお会いすることなんですもの…………どうしても お聞きしたいことがあって」

クラリスは、真剣な顔をして 金の林檎^{アヴァル}を抱え込んだ。

そんな彼女の様子に デイムナは、呆れた顔をする。

「聞きたいことって まさか……さ？
15年前のことを？
村のみんなの噂話でしか 知らないが」

「ええ……そうよ。
あたしは、どうしても 信じられないの」

「昔話を聞いて……何を知りたいんだよ」ルークは、溜息をつきながら 呟く。

「ちょっと ルーク?!
他人事じゃないでしょう?だって……15年前のことは……
……」クラリスは、悲しげな顔で 言う。

「おい……クラリス」

ディムナが、止めようとするが クラリスは、言葉を続けた。

「ルーク……貴方は、悲しくないの？
あんな風に 自分の両親を悪く言われて……あたしだったら 悔しいわ？
写真でしか知らないのに……周りには、そんな風に教えられるだなんて」

「クラリスは、俺の気持ちがわかるとでも？
自分の気持ちは、自分にしかわからないよ」ルークは、小さく呟く。

そして 何も言わずに 走り去ってしまった。

「ルーク……………」

「だから 止めようとしたんだ」

ディムナは、泣き出しそうな顔をしている クラリスの頭を抱きしめる。

「ルークにとつて 亡くなった 両親のことは、琴線なんだ。
特に この時期は……………」ディムナは、神妙な表情を浮かべて 言う。

「わかつているわ？」

でも そろそろ 乗り越えないといけないことだと思つた。
それが、今のルークに大切なことなんだと思つたのよ「クラリスは、
涙を拭きながら 呟く。

「まあ……………それは、あいつもわかつているはずさ。

人のことを言えているんだから……………自分の中では、色々葛藤もあるんだろう」

ディムナは、そう言って 空を見上げる。

+ + + + +

ルークは、両親がいない。

2人は、ルークが赤ん坊の時に 死んだ。

その事件は、このアヴァロン村での大きな出来事だった。

ルークの両親は、神を裏切った存在として 国から追われていたのだ。

それを明らかにしたのは、彼らに子供——ルークが、生まれた時だった。

このケルト王国では、髪の色と瞳の色で その者が、精霊持ちであるか 何の精霊に加護されているのかを知る。

精霊に加護されていない者は、基本 茶色の三段階の色を持つ。

加護を受けている者は、その精霊の属する 色を持つ。（――火の精霊は、赤系 水のは、青系というように）

けれど 精霊持ちの中でも 特殊な部類に入る場合が、あった。

まずは、ケルト王国の始まりとなった 『闇を纏う者』。

彼らは、王族である意味合いを持ち 加護する 精霊の数も、半端ない。

そして もう1つが、『禁忌人』。

この者達は、色を持たない（・・・・・・）―― 神から 否定されているのだことを示す。

ルークの髪の色と瞳の色には、色がない。

この事実が、公になり 村人は、ルークを恐れた。

そして 国から派遣された 軍に連行され 公開処刑されてしまったのだ。

ただ 1人生き残った ルークは、その後 アヴァロン村の村長の計らいによって 引き取られ 今では、納屋を借りて 無理で獣を狩ったり 果実を摘んで 生活している。

成長するにつれて 両親の面影を見出すようになってきた ルー

クは、幼馴染のディムナや隣村の孤児院の悪ガキと村長の娘である
クラリスを除いて 自分から 接触することが少な

い。

みんな 腫物を扱うように接してくるので 心を許すことができ
ないのだ。

大人達は、特に ルークのそばにすることで 天罰を受けること
を恐れていた。

それが、村中に感染し 今では、話しかけてくる人も、ほとんど
いない。

ルークは、ただ
闇雲やみくもに走っていた。

+
+
+
+
+
+
+

「あゝあ……………クラリスに、八つ当たりしちゃったよ。
ディムナも、呆れているのかな？」

「こんなんじゃない……………あいつのことを、とやかく 言えないじゃない
か」ルークは、悲しげに 呟く。

立ち止まって 空を見上げた。

「別に……………興味ないわけじゃないんだよ。
だけど 何だか 怖くて仕方がない。
どうして……………僕は、色がないの？」

ルークは、悲しくなって その場に蹲る。

その周りに 精霊達が、心配そうに 飛び回っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5898v/>

Adventure of jewel

2011年11月20日16時10分発行